

平成30年 8月29日現在

機関番号：32630

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26770045

研究課題名(和文)バロック時代の舞踏譜に見られるフィギュールの形態の分析

研究課題名(英文)Analysis of floor patterns in notated choreography of the Baroque period

研究代表者

赤塚 健太郎 (AKATSUKA, Kentaro)

成城大学・文芸学部・准教授

研究者番号：10528821

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：バロック時代に広く用いられた舞踏譜は、俯瞰図として振付を記すものであり、ステップに加えて踊り手が描く軌跡(=フィギュール)をも克明に記録する。既存の研究は、この軌跡に対称性が顕著であることを指摘してきた。本研究では、この軌跡を分析する独自の方法の確立を試みた。その際、対称性を空間や時間に基づいて区分し、加えて平行や動作の反復という重要な動作原理も加えて分析方法を確定した。さらに、この方法に基づいて多数の舞踏譜集の分析を行い、当時の振付における軌跡には、劇場用振付と舞踏会用振付で大きな差があること、踊り手の性別による差や、舞踏の種類による差が顕著であることなどを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In notated choreography widely used during the Baroque period, dances were recorded from an aerial view, thereby showing not only the steps but also the patterns traced by dancers on the floor as they move. While previous studies observed that these patterns often show clear symmetry, this study establishes an original method to analyze these floor patterns. It subdivides symmetry from the viewpoint of space and time and introduces other principles of patterns, such as parallelism and repetition.

This original method makes it possible to analyze the floor patterns of notated choreography more comprehensively. Many choreography collections are examined using this method and remarkable differences between dances for balls and those for theatrical works are revealed. Furthermore, this method proves that dancers' gender and the genre of the dance strongly influence floor patterns.

研究分野：音楽学

キーワード：西洋音楽史

## 1. 研究開始当初の背景

バロック時代、特に 1700 年代初頭に広く用いられた舞踏譜は、当時の舞踏の振付を伴奏舞曲とともに伝えてくれる資料として従来から重要視されてきた。近年では、研究対象として当時の舞踏譜を用いるだけでなく、それに基づいて復元した舞踏を上演したり、あるいは学んで楽しむということも広く行われている。

これらの舞踏譜のほとんどは、1700 年に舞踏家 Feuillet が『コレグラフィ』という著作によって公表した舞踏記譜法によって記譜されている。この記譜法は、舞踏空間を上空から俯瞰した形で振付を記すという特徴を持つ。踊り手の平面における動きは動線によって明確に示され、さらにその動線に沿う形で、遂行されるステップが記号によって記される。この際、動線は時間軸としての意味も併せ持ち、起点から終点までを追いながらステップ記号を読み解くことで、振付の具体的内容を知ることができるのである。

この動線については、それ自体がしばしば幾何学的な、あるいは装飾的な形態を示すこと、さらに複数の踊り手が同時に踊るような振付では、動線が顕著な対称性を示すことが従来から指摘されてきた。こうした踊り手が軌跡として舞踏平面に描く模様は、一般にフィギュール乃至フィギュアと呼ばれ、当時の舞踏における欠かすことのできない要素と見なされている。

さらに踏み込んで、フィギュールの形態について、舞踏会用の振付と劇場用の振付の違いを示す要素として言及したり、個々の舞踏種の特徴として指摘したりするような言説も、しばしば目にする。しかし実際には、明確な基準や方法を用いて一定数の舞踏譜のフィギュールを分析するような研究は、これまでほとんど行われてこなかった。貴重な例外として、後述する Lancelot の舞踏譜カタログに掲載されている大変に充実した冒頭所見において、フィギュールに関する一定の計量的な分析結果が掲載されていることが挙げられる。しかし、それとて、特定の舞踏種に対する限られた視点からの分析に留まっている。

このように、舞踏譜に記された振付のフィギュールに関する学問的な研究は、これまであまり進展していない。その原因として、明確な分析方法の欠如を指摘することができるだろう。フィギュールは、動線が織りなす模様として舞踏譜上に明記されている。しかし、それは一定時間内に踊り手が動いた結果として記憶されるものであり、直接に、そして同時に観衆の目に捉えられるものではない。そもそも舞踏譜は俯瞰図として記されるが、舞踏空間を上空から眺め下すような視点を観衆が持つことはない。つまりフィギュールは、舞踏譜においては明瞭なものでありながら、実際の観衆にとっては必ずしも自明とは言えないのである。このように、フィギ

ュールは、記譜上の形態と実演に即して把握される姿の間に距離があるものであって、それを分析する方法の確立は、一定の困難を伴うのである。

しかし、フィギュールが当時の舞踏において無視できないものであることは疑いない。そもそも、フィギュールを明示するような記譜法が考案され、広く利用されたということは、フィギュールが当時の振付を規定するような重要な要素であったことを予示している。よって、フィギュールに関する明確な分析方法を打ち立て、それに基づく形で根拠ある考察を行うことは、重要な研究課題であるといえる。

## 2. 研究の目的

上記の背景を踏まえ、本研究は、まずフィギュール分析の方法を確立することを目的とした。その際、基本的には振付の実践に即して観衆の眼前に現れる踊り手の動きを重視した。これは、「1. 研究開始当初の背景」で記したように、舞踏譜に現れる動線の形態自体は、観衆にとって不可視のものだからである。

しかし、舞踏譜上に固定された動線の形態について一定の配慮を払うこともまた重要である。これは、踊り手の意識の中では、舞踏譜の視覚像が何らかの意味を持つ可能性があるからである。

以上の視点に立って確立されたフィギュールの分析方法については、「3. 研究の方法」で詳述することとする。

このようにして独自の分析方法を確立した上で、本研究では、当時の舞踏譜のフィギュール分析を行うことを次なる目的とした。その際の大きな問題設定として、まず舞踏会舞踏と劇場舞踏の違いを明確にすることが挙げられる。

当時の舞踏会は、専用の空間で行われるのではなく、宮殿や貴族の館などの一室で行われることが多かった。そこでは、舞台と客席の区別は明確ではなく、舞踏空間を取り巻くように観客が配置されることが一般的であったと考えられている。一方、劇場舞踏は、舞台と客席が明確に切り分けられた空間で行われることが多かった。このような空間配置の相違から、舞踏会用の振付と劇場用の振付で、対称性の現れ方が異なることが予想される。実際、明確な方法に基づく実証的な研究ではないものの、両者の示す対称性の相違に触れる言説はこれまでもいくらか行われてきた。よって、舞踏会用の振付と劇場用の振付が形成するフィギュールの違いについて、本研究で確立した分析方法を用いて確認することが重要な課題となる。

さらに、時代ごとのフィギュールの相違や、振付家ごと、あるいは舞踏種ごとのフィギュールの傾向を浮き彫りにすることも、本研究における重要な問題としてとして設定された。これらの視点からのフィギュール分析は

前例が乏しく、当時の舞踏の実態に迫る上で重要な知見を切り開くことが期待されるのである。

### 3. 研究の方法

本研究では、後述する範囲の舞踏譜を読み解いて、そこに現れるフィギュールの特徴を把握した上で、それらを十分に反映することができるような分析方法を検討した。その結果として導き出された分析方法の概略をここに記すこととする。なお、既存の研究においてフィギュールの対称性への言及が多くなされていることを踏まえ、本研究は対称性が顕著となるペアの振付を考察範囲とする。

#### (1) フィギュール分析の方法

フィギュールの分析に際しては、踊り手の動きを振付の小節単位で検討し、そこに見られる対称性について、点対称と線対称に分けて確認することを基本とした。小節単位で確認することで、実際に踊られる際に即時的に形成されるフィギュールの特徴を把握することが可能となる。

対称性の確認のためには、踊り手の動く方向と上体の向く方向を判断基準とした。一方、ステップを踏む際の脚の左右については判断基準から除外した。脚の左右は、形成される対称性が線対称であるか点対称であるかを分かつ重要な観点となりうるものである。しかし、舞踏種によっては各小節を開始する脚の左右がほぼ決定されているようなものも存在する。それらについて脚の左右まで判断基準に加えることは、結果の著しい偏りを招くことになる。むしろ、見る者にとって重要なのは踊り手の身体の動きと向きであると考えられるため、動作する脚の左右については考慮から外した。

なお、ペアが形成するフィギュールによっては、点対称と線対称の双方を兼ねる両義的な動きが形成されることもあるが、それについては前後の動きからいづれかに区分を行った。

以上のようにして対称的な動きを見出したが、点対称や線対称に当てはまらない動きも一定の頻度で確認された。しかし、それらのフィギュールについても、一定の幾何学性が読み取れるものが多かった。それらをくみ取るため、平行という区分を設けた。これは、ペアが相対的な位置関係と方向を保ちつつ、同じ方向に同じステップを踏むものである。典型例として、手をつないだペアが同じステップを踏みながら同一方向に動くような場合が挙げられる。

この平行自体は対称性を形成しないが、しかし平行を保ちながら遂行される数小節のステップが、結果として何らかの対称的な模様を残す事例がしばしば観察された。これらは、「結果としての対称」として評価することとした。

また、平行が確認される個所において、同

一のステップを別方向に反復するような事例も頻繁に見受けられた。例えば、あるステップを踏みながらペアが左方向に移動し、続いて同一のステップを踏みながら右方向に移動して元の位置に戻るような場合である。これらを、「反復による対称」として評価することとした。

点対称や線対称、平行のいずれにも当てはまらないような小節においても、特徴的なフィギュールが見られることがあった。特に、一部の振付で、ペアが同じ動作を遂行する際、適宜休止を挟むことで時間的なずれを発生させるような工夫が見られた。これらは対称や平行には数え入れられないものの、「時間差を伴う対称」として別に評価した。

#### (2) 分析対象とする舞踏譜集

続いて、以上のような方法を実際に適用してフィギュール分析を行う範囲について確認しておこう。

なお、舞踏譜集及び個々の舞踏譜については、現在出版されている2つの舞踏譜カタログにおける整理番号によって特定することとする。2つのカタログとは、具体的には下記の2書であり、前者における整理番号をLM、後者におけるそれをFLで開始される略号で記す。

Meredith Ellis Little, Carol G. Marsh. 1992. *La danse noble: An Inventory of Dances and Sources*. New York: Broude Brothers.

Francine Lancelot. 1996. *La Belle Dance*. Paris: VAN DIEREN ÉDITEUR.

まず、既存の言説においてしばしば触れられる舞踏会用振付と劇場用振付の差異を確認するため、『コレグラフィ』と同じく1700年に出版されたFeuilletの舞踏譜集(LM 1700-Feu, FL/1700.1/)とPécourの舞踏譜集(LM 1700-Péc, FL/1700.2/)を分析対象とする。これらの2つの舞踏譜集は、『コレグラフィ』と組にする形で広範囲で用いられた重要な舞踏譜集である。またFeuilletのものが劇場用振付を中心としているのに対し、Pécourのものは舞踏会用振付を集めたもので、劇場用と舞踏会用の振付の差異を確認するためにふさわしい資料となる。

ただし、そこで確認された差異が、FeuilletとPécourの個人様式の違いに由来するものである恐れもある。そのため、Pécourの手になる劇場用振付を集めた大規模な舞踏譜集(LM 1704-Péc, FL/1704.1/)も分析対象に加え、個人様式の影響を見積もる助けとする。

以上の考察に加え、さらに広い範囲でフィギュールの変遷や舞踏種ごとの特徴、振付家ごとの傾向を把握するため、本研究ではフランスで継続的に出版された年次舞踏譜選集を分析対象に加える。年次舞踏譜選集は、18世紀初頭の20年ほどの間に、おおむね年に1集の頻度で出版された舞踏会用舞踏譜集

で、次の舞踏会シーズンに踊られる振付を紹介するという重要な意味を持っていた。第23集まで出版されたこの選集シリーズの内、現存していないものや私蔵されており調査できないものを除いた20集を考察対象とし、それらに収録されたペアの振付50件を分析した(煩瑣となるのでカタログ番号は省略する)。

なお、今回設定した分析方法は、ペアのための振付を念頭に置いたものである。よって、各舞踏譜集に含まれるソロ用の、あるいは4人以上の踊り手のための振付は、対象から除外される。以上を総合すると、85件の振付が調査対象となる。

#### 4. 研究成果

##### (1) 舞踏会用振付と劇場用振付の比較

まず、Pécourの舞踏譜集(LM 1700-Péc, FL/1700.2/)を舞踏会用の、Feuilletの舞踏譜集(LM 1700-Feu, FL/1700.1/)を劇場用の代表的な舞踏譜集とみなし、それらについてフィギュール分析を行った。その際、「3. 研究の方法」で示した分析方法によって小節単位で対称や平行について確認した上で、振付ごとにそれぞれの出現頻度を求めた。そうして求めた振付ごとの各要素の出現頻度を、舞踏譜集単位で単純に平均したものが[表1]である。表内ではLittleらのカタログにおける略号のみを掲載している。

なお、線対称における対称軸は様々な方向のものが考えられるが、今回の研究で確認された線対称のフィギュールは、大多数が舞踏譜における縦方向に対称軸をとるものであった。よって、僅かに確認された他方向の対称軸による線対称は、本報告におけるいずれの表においても除外されている。

[表1] 舞踏会用振付と劇場用振付の比較

舞踏譜集	件数	線対称	点対象	平行
1700-Péc	9	39.4%	48.0%	10.6%
1700-Feu	5	74.9%	25.1%	0%
1704-Péc	21	70.6%	25.1%	1.6%

[表1]から明らかなように、2つの舞踏譜集の間には歴然としたフィギュールの傾向の違いが確認される。Pécourの舞踏譜集(LM 1700-Péc, FL/1700.2/)に比べ、Feuilletの舞踏譜集(LM 1700-Feu, FL/1700.1/)は、はるかに高い頻度で線対称のフィギュールを用いているのである。

ただし、これら2舞踏譜集の相違が、単に振付者の個人様式に由来するものである可能性もある。そこで、Pécourによる劇場用振付を多数収録した1704年の舞踏譜集(LM 1704-Péc, FL/1704.1/)も同様に分析し、その結果を[表1]最下段に加えておいた。この舞踏譜集の示す傾向は、Feuilletの舞踏譜集と極めて高い類似性を示すものであった。

以上から、フィギュールの対称性の違いは、

舞踏会用と劇場用という用途の違いに由来するものであると確認された。劇場用振付における線対称フィギュールの多用は、ステージと客席の区分された劇場的な空間を反映しているといえるだろう。一方、舞踏会用の振付における点対称フィギュールの頻出は、舞踏平面を取り巻くような観衆の配置を踏まえていると考えられる。

##### (2) 舞踏会用振付の経年変化の確認

続いて、年次舞踏譜選集に収録された舞踏譜についても同じ方法による分析を行った。その結果をまとめたものが[表2]である。なお、経年的な変化の傾向を把握するため、対象となる全舞踏譜集の分析結果([年次選集全体])とは別に、第9集(LM [1710]-Rcl, FL/1710.1/)までの結果(「年次選集前期」)と、第10集(LM 1712-Rcl, FL/1712.1/)以降の結果(「年次選集後期」)を別途集計した。これは、第10集から編集・出版の体制が変化したことを踏まえたものである。

[表2] 年次舞踏譜選集の分析

舞踏譜集	件数	線対称	点対象	平行
年次選集全体	50	37.6%	51.0%	3.0%
年次選集前期	21	33.5%	56.1%	2.7%
年次選集後期	29	40.5%	47.2%	3.2%

[表2]の[年次選集全体]の数値は、[表1]のPécourによる舞踏会用舞踏譜集(LM 1700-Péc, FL/1700.2/)のものと同様であり、大きな変化がないことを示す。また、「年次選集前期」と「年次選集後期」の数値を見ても大きな変化は確認されず、今回の研究の対象期間において、舞踏会用振付のフィギュールには大きな変化がなかったことが確認される。

しかし、線対称・点対象・平行のいずれにも区分されない小節の割合が増加している。[表1]の3舞踏譜集では、いずれにも当てはまらない小節の頻度がそれぞれ2.0%、0%、2.7%であったのに対し、[表2]ではそれぞれ8.4%、7.7%、9.1%と高まっているのである。これは、用いられるフィギュールの多様性が高まった結果と考えられるだろう。こうしたいずれにも当てはまらない小節には、しばしば「時間差を伴う対称」が確認された。

##### (3) 振付家別の比較

続いて、振付家別のフィギュール傾向の違いを検討した。今回の調査対象となる舞踏譜は、振付者不詳のものを除くと、ほぼ全てが当時の代表的な4人の舞踏家によって振り付けられており、他には1件のみ振り付けた舞踏家が若干存在するだけである。

4者の傾向はほぼ同一であり、Dezaisのみが若干異なった傾向を見せている。彼の振付は、点対称を多用しており、また平行の使用頻度も高い。ただし対象となった振付件数がやや少ないため、彼の振付に見られる一般的

な傾向と断じることができるかは慎重に判断する必要があるだろう。

[表3] 振付家別の分析

振付家	件数	線対称	点対象	平行
Feuillet	12	56.0%	42.7%	0%
Pécour	48	49.8%	41.1%	3.9%
Balon	17	50.1%	36.6%	2.8%
Dezais	6	19.8%	69.7%	4.5%

#### (4) ペア種別の分析

本研究では、振付の種別による分析も行った。まず、ペアとなる2人の踊り手の性別による傾向の違いを確認した。

調査対象とした舞踏会用振付は、いずれも男女のペア用のものである。一方、劇場用の振付については、女性同士、あるいは男性同士のペアのための振付も確認される。それらと比較したものが[表4]である。なおペア種別の分類は、Lancelotの舞踏譜カタログに従った。

[表4] ペア種別の分析

ペア種別	件数	線対称	点対象	平行
舞踏会(男女)	61	38.7%	50.1%	4.0%
劇場(男女)	15	61.1%	32.8%	2.2%
劇場(女女)	1	64.6%	35.4%	0%
劇場(男男)	8	93.8%	6.3%	0%

この表から、ペア種別によってフィギュールの傾向が異なることが明瞭に読み取られる。点対称を重んじる舞踏会用の振付に対し、劇場用の振付が線対称を多用する点は「(1)舞踏会用振付と劇場用振付の比較」で既に確認した通りだが、さらに後者については、男性同士のペアのための振付においてほとんど点対称のフィギュールが用いられていないことが明らかである。また、平行の出現頻度にも大きな違いがあることが確認される。

この相違については、男女が手をつなぐ動作の有無と一定の相関を示している。舞踏会用の男女ペアの振付においては、男女が手をつないで踊る機会が多く、劇場用の男女ペアの振付においても、若干頻度は下がるものの手をつなぐ機会は見られる。一方、同性ペアの振付では、手をつなぐ動作は一切確認されなかった。

そして手をつなぐ場合には、しばしば点対称のフィギュールが描かれ、さらに手をつないだまま位置関係を保って動く平行のフィギュールも頻出した。以上の結果から、踊り手の性別がフィギュールに与える影響が大きなものであることが確認された。

#### (5) 舞踏種別の分析

振付の種別による分析としては、舞踏種ごとのフィギュールの傾向についても調査した。この際、全ての舞踏譜において舞踏種が明記されているわけではないという大きな問題が生じる。そこで、本研究では Little

らのカタログにおける舞踏種判定を尊重し、それに従うこととした。場合によっては、同一の舞踏譜が複数の舞踏種に数えられている例も見られたが、それらについても Littleらのカタログの判断を踏襲している。

また、1つの舞踏譜が複数の部分に分かれ、それぞれが異なった舞踏種を用いているような組曲仕立ての舞踏譜も複数存在した。これらについては、各部分を1つの振付と見なし、別に勘定することとした。

こうして得られたのが[表5]である。なお件数が3に満たない舞踏種については、表から除外されている。

[表5] 舞踏種別の分析

舞踏種別	件数	縦軸	点対象	平行
Bourée	19	36.0%	57.8%	3.0%
Forlane	7	38.5%	55.2%	0%
Gavotte	9	51.5%	38.3%	1.9%
Gigue	4	76.7%	23.3%	0%
Menuet	7	20.3%	66.7%	6.1%
Passepied	13	31.7%	41.4%	19.4%
Rigaudon	15	39.7%	54.8%	1.8%
Sarabande	3	69.6%	30.4%	0%

全体に件数が少ないため、明確な傾向の違いを指摘するのは困難であるが、MenuetとPassepiedにおいて、平行のフィギュールが明らかに多用されている点が見て取られる。なお、Passepiedはしばしばテンポの速いMenuetと見なされる舞踏種である。両者は、ステップの点でも類似性が高い。

この2種についてさらに詳細に舞踏譜を眺めると、これら平行の箇所では、高い頻度で男女ペアが手をつないでおり、しかも「結果としての対称」によって円弧を描いたり、「反復による対称」を形成することが多いことが確認された。これを、Menuet類の特徴として指摘することができるだろう。これは、Menuetが18世紀における舞踏会における花形舞踏として広く踊られていたことと何らかの関わりがある可能性が考えられる。一方、同じような役割を17世紀に担っていたCouranteも今回の調査対象には2件含まれていたが、手をつなぐ動作は一切確認されなかった。

#### (6) まとめ

以上のフィギュール分析から、舞踏会用の振付と劇場用の振付には確かに傾向の違いが見いだされた。具体的には、前者が点対称のフィギュールを多用するのに対し、後者は線対称のフィギュールを中心にしていた。さらに踊り手の性別も、フィギュールが線対称や点対称、平行を形成する頻度に大きく関わっていることが確認された。

一方、18世紀初頭に継続的に出版された年次舞踏譜選集からは、フィギュールに関する経年変化はあまり読み取られず、即時的な対称や平行を成さない小節の頻度がやや上昇

する傾向が確認される程度であった。しかしそれらの小節には、しばしば「時間差を伴う対称」が見いだされた。

振付家ごとのフィギュールの特徴や、舞踏種ごとの特徴はそれほど明瞭ではなかった。そうした中、Menuet および Passepied が平行のフィギュールを多用するという特筆すべき傾向を示しており、それらの箇所では、円弧を描くような「結果としての対称」や、「反復による対称」がしばしば見いだされた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

赤塚 健太郎 (AKATSUKA Kentaro)

成城大学・文芸学部・准教授

研究者番号：10528821